

●大城信栄

風立ちぬノオト

●立原道造と堀辰雄

風立ちぬノオト堀辰雄と立原道造

一九七三年二月一八日

著者・大城 信栄

装幀者・北小路 均

発行者・小田 久郎

発行所・株式会社 思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三・一五

電話東京二六七・八一四一・振替東京八一二一

印刷・宝印刷株式会社

製本・美成社

定価・九〇〇円・1091-200006-3016

●大城信栄

風立ちぬノオト

立原道造と堀辰雄

思潮社

風立ちぬノオト

大城信栄

思潮社

— 立原道造と堀辰雄

風立ちぬノオト——立原道造と堀辰雄

郁子と太郎に――

風立ちぬノオト

目次

9 ≪火山灰の章≫

43 ≪風と光の章≫

71 ≪光と雪の章≫

〈火山灰の章〉

《火山灰の章》

立原道造がはじめて堀辰雄を向島に訪ねて相識したのは 昭和七年十八歳の九月。それから立原は生涯にわたって堀とのつながりの中で過すことになる。歩みよりまたは離れる意志を時に激しく時に優しく想いながら ついに立原はその風景からのがれ得なかった。立原の幸も不幸も栄光も敗北も みんな堀を介してのそれだった。ぼくたちはふたつの魂というよりその継ぎ目さえさだかでないふたりの詩人の結び目に ぼくたち自身の裡なる共通項を見い出せたらと思う。それがもしかしたらぼくたちの生の希いになりはしないかと 期待と不安をかすかな予覚としながら。

それまでの立原は「硝子窓抄」「葛飾集」「葛飾集以後」の短歌や「あひみてののちの」或いは北原白秋に習作の詩をみてもらつたことまたは穉い戯作趣味を発揮したことなどはあつても それらの中に立原の詩心が芽生えていたことは確かだが いわばそれらは立原にとって「天文月報」や「万有科学大系」などと同じくらしいの次元であつたらう。早熟な

少年が何にでも輝やく瞳を向けるように。立原の実質共の詩人としての出発は やはりそこに堀との出会いを据えなければならない。堀との出会いの前後に「堀辰雄詩集」や「日曜日」「散歩詩集」などの手製本が編まれている。それでも短歌から詩へ移行する時 立原の裡で小さくともひとつの転期はあったに違いない。短歌は短い形式のためその動機に於て既にあきらめて現実を大ざっぱにつかむ、小説は現実の複雑さにつれて変化する。詩はその中間にあつて、そのリズムある形式のために苦しむ。（「火山灰以前」フォート）短歌と小説の間でリズムある形式に苦しんでいるのが詩だとみつつ 敢えて詩を選んでいったところに立原の希望もあったのだろう。現実にしめられている短歌と小説。それらをとらないで中間の音楽的なところのあやうさにかける。立原にとっては 現実と浅くも深くも関わらないことによって詩の純粹性が信じられたのだろう。立原のこの断片は ある程度時代的背景も考えなくてはならないだろう。たとえば現代ぼくたちが持つことのできる歌人の一部は この断片からはみ出してくるのではないだろうか。時代の複雑細分化は短歌の手法で より緻密にすくいあげられる可能性もあること。破片が全体をより語り得る場合もあるということ。立原の流動性としての面からいえば むしろ小説の方にも可能性が言えるかもしれない。無論 立原風景として受け入れられている「萱草に寄す」「暁と夕

の詩」などの　ごく限られた構築度の高い或る面では終ってしまっていた風景は別にして「風立ちぬ」論北南の旅を含むその短い生涯を概観しての感想なのだが。立原は晩年芥川龍之介の「河童」のような作品を書きたいと知人にもらしていたそうである。戯作的な意でいえば　立原は堀より芥川に近かったかもしれない。ともあれ立原に詩の純粋性という認識を与えたのは　堀以外の誰でもなかった。

堀辰雄が「芥川龍之介」論を　東京帝国大学国文科の卒業論文として書いたのが昭和四年。そのサブタイトルに――芸術家としての彼を論ず――とあるように晩年の芥川に焦点をあて　文学史上の位置とか作品の価値とかいう外面性より　堀の裡なる芥川像という風なものであった。芥川の死を契機に書かれる「聖家族」。その出発が死であり　途上での様々な身近の死　芥川（昭和二年七月）矢野綾子（昭和十年十二月）立原（昭和十四年三月）津村信夫（昭和十九年六月）野村英夫（昭和二十三年十一月）等のそれらをみつめ　自らも病みながら超えてゆかねばならなかった。最後の作品「雪の上の足跡」で　雪と立原の死がダブルイメーヂとなって消えてゆく。立原とのはじめての出会いまでに堀がどういう過程にあったかということは無論みなければならぬことであるが　しかし堀の場合晩年の古典まであまり曲折がないように思う。西欧主知主義みたいな風貌ははじめからそなわっていたと思えるし

「菜穂子」以後の日本古典の風景もそれほど回帰といえるかどうか。だからこの昭和七年九月というのが堀にとってどういう時期だったかをぼくたちがみるに 平面上の単なる時間の句読点としてみていいかと思う。立原の堀との出会いから短歌より詩へという実作上の変化も 堀には芥川との出会い（大十二年）になかった。それまで「ジャン・コクトオ詩抄」「ルウベンスの偽画」「不器用な天使」「聖家族」の作品があり 昭和七年にはやっと芥川の死から一段落した頃だった。一月に「燃ゆる頬」があり八月に「プルウスト雑記」がある。ひとつの死を超え少しの安らぎの中で 堀は立原を迎えた。堀に立原がはじめて見たもの。それは詩だった。ジャン・コクトオ ギイヨム・アポリネエル アルテュル・ランボオに裏打ちされた三編の詩を選んだ立原の「堀辰雄詩集」は 立原が当時みた堀のはじめての姿だった。短編の創作やレエモン・ラジゲなどの小品もあったにかかわらず立原のみたのは詩人堀辰雄だった。死の風景で重苦しく悩んでいる小説より 死と戯れている詩の方をとった立原。それが五年後の「風立ちぬ」論で変身に思いをきたすまで変らなかった 立原と堀との過分の優しい結びつきであった。一年の猶予をおいて昭和九年 立原は東京帝国大学工学部建築科入学と共に堀風景へ入って行く。

立原の堀風景。それは月刊詩誌「四季」の創刊にはじまり 急速に深まっていった。

郵便函は荒物店の軒にゐた

手紙をいれに 真昼の日傘をさして

別荘のお嬢さんが来ると 彼は無精者らしく口をひらき

お嬢さんは急にかなしくなり ひっそりした街道を帰つて行く

※

道は何度ものぼりくだり

その果ての落葉松の林には

青く山脈が透いてゐる

僕はひとりで歩いたか さうぢやない

あの山脈の向うの雲を 小さな雲を指さした

※

虹を見てゐる娘たちよ

もう洗濯はすみしました

真白い雲はおとなしく

船よりもゆつくりと

村の水たまりにさよならをする

※

あの人は日が暮れると黄いろな帯をしめ

村外れの追分け道で 村は落葉松の林に消え